

## パートナー情報誌「香澄」20号発行に寄せて



パートナー情報誌「香澄」は、平成19年4月30日の第1号発行以来、今回で20号を発行することとなりました。最近の「香澄」は、見た目も色鮮やかで写真も多く、センター事業の紹介やパートナー自主活動事例の発表、趣味の話題など盛りだくさんで、編集者の熱意が感じられる読み応えのある内容となっています。「継続は力なり」という言葉通り、パートナーの皆さんの平素の努力の成果だと思えます。

あらためて第1号を読み返してみますと、巻頭言に・・・パートナーの更なる活動の充実とセンターの設立理念である「人と自然の共生する環境の保全・創造への取り組み」をグループの垣根を越えた「横断的活動と情報の共有化」で積極的に推進したい・・・と決意表明の言葉が記されています、パートナー活動の目標を言い得た言葉だと思えます。

ご承知のとおり、センターは、水質浄化に対する取り組みを行う総合的な拠点であり、果たすべき機能のひとつに“「市民活動との連携・支援」＝協働（パートナーシップ）”を標榜しています。言うまでもなく協働の主体は、市民であり、行政と相互に補完し合う関係を意味します。このことは、センターとパートナーとの関係にも例えられると思えます。

私は、センターに勤務して2年間、パートナー活動を支援する気持ちを忘れずに仕事をしてきました。そうさせたのは、担当者として3年間熱意を持って支援し続けた前任の中原主事のパートナー活動に対する熱意と頑張り、さらに、卓越した知見と行動力でパートナー活動をリードしていただいている方々に対する感謝の気持ちに他なりません。

早いもので、センターも開館後6年間が経過しようとしています、前田センター長はじめ、開館以来センター運営に携わってこられた諸先輩の努力を無にすることなく、名実ともに霞ヶ浦の水質浄化の拠点施設としての役割を担い、全うするためには、パートナーの皆さんとの協働が不可欠であり、相互に連携しながら活動を発展させていくことが何より重要です。

以前読んだ本に「夢+日付=目標」と書いてありました。既に夢を叶えた人生の大先輩たるパートナーの皆様とともに、新たな「夢」を見つけることができたら幸いです。これからも、「日に新たに、日に新たに、また日に新たなり」の気持ちを忘れずに、日々を送りたいと思います。終わりに、今後のパートナー情報誌「香澄」の益々の充実と、パートナー各位のご健勝をご祈念申し上げます。  
(環境活動推進課長 鈴木 勇)

## 「香澄」20号までの歩み

「香澄」は今号で第20号の発行となります。世間一般から見れば20号ではまだまだ“ひよっこ”の段階でしょうが、一つの節目としてこれまでの経過を振り返って見たいと思います。



### 1 「香澄」の前身「てんじー」

展示解説G（現研修G）の中でパートナー間のお互いの情報交換及びスキルアップ活動を形として残すためのツールとして新聞発行がリーダーより提起され2006（H18）年4月に展示解説Gパートナー新聞「てんじー」が創刊され同年中に3号まで発行されました。

### 2 「パートナー香澄」の創刊

その後パートナー全体に輪を広げ各Gの枠を超えてパートナー同士が情報を共有・交換できる場としていくよう各Gに働きかけ、賛同された有志8名が編集委員として検討を重ね「パートナー香澄」と名称を変更し2007（H19）年4月30日に第1号が発行されました。当初はパートナーの独自の活動でありパートナー室に掲示するだけでしたが、センター側の支援を得られるようになり、第3号からカラーコピーでパートナー全員に配布される体制になりました。また、広く投稿を呼びかけ編集委員以外のパートナーからのエッセイやセンター側からの記事も掲載されるようになり内容的にも少しずつ充実してきました。

### 3 「パートナー情報誌 香澄」への発展

パートナー活動のより一層の活性化を図る目的で2009（H21）年5月にパートナー企画・広報委員会の設置が提案されました。この中でパートナー有志とセンター職員からなる編集部が結成され「パートナー香澄」を引き継ぎ第10号より「パートナー情報誌 香澄」として発行して行くことになりました。

これに合わせ従来の3ヶ月に1回から2ヶ月に1回の発行に変更し、グループ活動報告の充実を図って行くことにした。

### 4 ホームページへのアップ

2010（H22）年4月より霞ヶ浦環境科学センターのホームページの中に香澄をアップすることとし、現在11号以降がアップされています。パートナー活動の外部へ向けた発信であり、パートナー活動が外部からも理解が得られるよう更なる紙面の充実が今後の課題です。  
(安川)

## 「香澄」編集委員 座談会 ～「香澄」のこれまでとこれから～

「パートナー情報誌 香澄」(以下「てんじー」「パートナー香澄」を含めて「香澄」という)は今号で第20号の発行を迎えることが出来ました。これを一つの節目として、更に充実を図っていくための課題も出てきたのではないのでしょうか。日ごろ編集・発行に携わっておられる「香澄」編集委員の皆さんにこれまでの思い出や苦労話、これからの課題や期待について語って戴きます。

**安川:** 皆さんが「香澄」編集委員として活躍されているのは、センターパートナーとして登録された思いにも関わっているのではないのでしょうか。まずはパートナーとして登録された理由などから話をお願いします。

**有吉:** かつて県職員として一時期霞ヶ浦開発事業の推進に携わって来たことから“現状の改善になにかしら役に立つことができれば”との思いでパートナー活動に参加してきました。

**浅野:** 私はながらく「水」に関わる仕事をしており、大半は東京通いでしたので時間に余裕がもてるようになったら故郷茨城にこれまでの経験を生かして何かお手伝いできれば、と常々思っていました。その後、県主催のエコカレッジ実践コースを受講し、その終了時とセンターの開所時期が重なり、パートナーに登録しました。編集委員になったのも、若い人からパワーを貰え、認知症予防にも役立つかなという思いもありまして。

**稲葉:** 定年後の生活設計を2年かけて練り上げました。大きな出費でもない限り、経済的には何とかなると踏んで、時間枠を三つに分けました。1つ目は脳を刺激するための趣味(水彩画、彫刻、読書)。2つ目は運動(散歩、自転車)。3つ目は様々な意味でのボランティア活動。センターでのパートナー活動は三つ目のひとつに過ぎなかったのです。環境の「かの字」もない不純なものでした。

**安川:** 昨年のパートナー全体交流会後のアンケート結果が「香澄」18号に掲載されていますが、パートナーに登録しようと思った理由として“環境問題に興味があった”が6割くらいですが、それ以外にも“ボランティア活動に興味があった”“退職後の生きがいを求めて”“さまざまな人と交流すること”などもかなりの割合であり、定年退職後の生きがいとか違った仲間との交流を求めることがベースにあるのかも知れませんね。そのためにも情報を交換・共有化できることが重要で「香澄」の存在意義があるのでしょうか。

**尾形:** 2005年の春、定年後の初仕事は設立されたばかりの霞ヶ浦環境科学センターでのボランティア活動でした。同じような仲間と初めて接し、現役での人間関係にはなかった新鮮な気持ちでした。私が、活動を通じて最初に感じたのは各活動グループとの情報の共有化と連携でした。恐る恐る図書グループ所属の稲葉さんと平江さんに話したら快く賛同いただき、「香澄」の前身であります「てんじー」を展示解説グループとして2006(H18)年4月に初めて発行しました。その後センター関係者のご支援も得ながら、パートナーの情報誌として、名称も新たに「パートナー香澄」とし、各編集委員の原稿を慎重に読み合わせ、誤字・脱字・言い回しなどをチェックした第1号は、点から線へと情報が繋がり感激しました。

**平江:** 2007(H19)年4月に「香澄」の第1号が発行された時が、一番思い出深いですね。ただ、当時は毎号原稿の作成は編集委員が担当していたので、テーマの選定や文章を書くことに対し苦手な私にとって結構苦痛の日々だったことを思い出します。

**栗原:** 「香澄」第1号が発行された当時、私は各グループの活動たる全体感がわからず、それを得る情報手段が無く皆に聞いて回るしかなかった。今では誰でも「香澄」を読むことでセンター行事での活動及び各グループの情報がわかるようになったのは大変な進歩ですね。

**有吉:** 「てんじー」から「香澄」へと、そして色々な制約を受ける中で、植物グループパートナーを代表した編集委員という立場から定期的にグループ活動記録を記事にして来ましたが、今やこのことには肩が凝るようになって来ました。また、植物グループ活動の準備や成果の整理を含めてパソコンの前に座っていることが多くなり、家内から何時までやっているのかと責め立てられています。幸いと云うか昨年12月で後期高齢者の仲間入りしたことであり、この辺でお役御免を願いたいと思っています。

**稲葉:** パートナー歴7年目となり、私自身の活動量は当初の5分の1ほどになっています。理由は往復で84kmと遠いことです。でも「香澄」の編集会議だけは毎回参加しています。1号から紙面編集を担当していますが、様々な特徴のある文章を入力するのは大変です。最近はデータでいただくことが多く助かっています。頭と目と指の機能との戦いになるかも知れませんが微力ながらこれからも「香澄」の継続と発展に協力するつもりです。

**安川:** 7年目ということは我々も7つ歳をとったということですから、今後も長く継続して行くためにはそろそろ世代交代を図っていく時期かも知れませんね。また、内容的にもマンネリ化を避けるため編集委員も新しい人をふやしていくことが必要です。

**中根:** “パートナー同士、またパートナーとセンターを結ぶ情報誌”として創刊された「香澄」ですが20号を迎えてその目標も達成されつつあるように思います。私が編集部会に参加させて頂いたのは15号からなので、その歴史で云えばほんの一部ですが、今回この記念すべき20号の発行に関われたことをとっても嬉しく思っています。

**高橋:** 2ヶ月に1回発行ということは大変なご苦労があったかと思います。本来はパートナー同士の情報交換という役割が期待されていたものと思いますが、一般の来館者の方も「香澄」をお手に取ってご覧になっている場面もありました。昨年からはインターネットに掲載されておりますので、広く一般へパートナー活動を紹介するというもう一つの機能がだんだん定着してきたのではないかと思います。

基本的にはパートナー情報誌ですから、パートナー間の情報交換がより図れる内容を充実していただければと思います。おそらく他グループのことは分からない方もいらっしゃると思いますので「香澄」の存在は貴重なものだと考えます。一方、インターネットに掲載するなど一般の方もご覧になられますので、その点を意識しつつバランスの取れた編集が望まれます。

**尾形**：去年はセンターのホームページにもアップされ、線から面への情報発信となり、一層の発行責任を感じています。今後とも、楽しく、ためになる、そして旬な情報が提供できるよう心掛けて行きたいと思いますのでご期待下さい。

**平江**：この「香澄」がパートナーの皆さんに親しまれる情報誌として30号、40号とはばたいて行ってほしいと思っています。それには、パートナーの方からのたくさんの投稿と紙面づくりへの参画によって、さらに充実した内容にして行って欲しいと思います。

**栗原**：今後長く継続して発行して行くには内容がマンネリ化しない工夫が必要で、企画会議を更に充実させて十分な企画を立てていく必要があると思います。また、編集委員の執筆が多いので、より多くの方に書いて貰いパートナー同士が情報を共有、交換しあうよう努力していきたい。

**浅野**：9：8、これは私の「香澄」に掲載された、“環境の保全・創造の取り組み”に関係した記事とそうでない記事の比率です。9件が多少とも環境の保全・創造の取り組みに関係した記事で、ほぼ半分です。香澄紙面全体を見ましても同じような傾向が見られます。これは、「香澄」発行の趣旨“人と自然の共生する環境の保全・創造への取り組みの情報を、グループの垣根を越えて共有する”と照らし合わせて、すこし少ない様に思います。

そこで、これからの「香澄」に望むことは、さらにグループの垣根を越えたパートナー情報誌となるために、

ひとつには各グループの活動トピックスを積極的に多くすること。二つ目は多くのパートナーが投稿してくれるよう編集委員の更なる働きかけと編集委員が記者となり情報を集めて歩くことが必要だと思います。

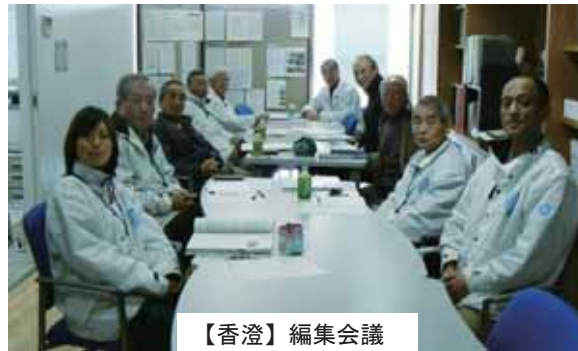
**有吉**：霞ヶ浦の水質を改善して行くには関係者みんなで考える必要があると思います。このため研修会や講演会など“霞ヶ浦の浄化推進に関する議論をする場”を設けて推進体制や活動方法などについての意見や提案を語り合いながら、パートナー参加者や投稿者の発掘を促していくことが投稿の普遍化というか編集委員以外の投稿を増やす方策になるのではないのでしょうか。また、センターや関連団体のイベントなどの行事予定表を入れて知らせ参加を促すことも有効ではないかと考えます。

**中根**：編集委員以外のパートナーの方からの投稿記事はもっと増やして行きたいですね。各グループの活動紹介はもちろん大切ですがセンターでの活動に限らずパートナーさん達の旅行記や趣味などについての自由な記事は読んでいてとっても面白いですし、普段は接する機会のない方のことを知れるきっかけになりセンター活動の更なる喚起になると思います。編集部が投稿記事

で溢れかえるくらい「香澄」を盛り上げていきたいですね。

**安川**：「香澄」にも色々な機能が求められるようになりますが基本的には“各グループの枠を超え情報を共有・交換し合うことによりパートナーの一体感、横断的活動の促進に役立つ情報誌”にあると思います。こうしてセンターパートナーとしてこの場に居るのも”なにかの縁“だ

と思います。この縁に感謝し、更に和（輪）を広げて楽しんでパートナー活動が出来ることを願っています。そのために編集委員だけでなく多くの人に参加し作っている情報誌になっていくことが必要不可欠な条件です。関係される皆さんの更なるご支援・ご協力をお願いします。



【香澄】編集会議

## “魅力とパワー”

この度は、『香澄』第20号の発行おめでとうございます。いつも発行を心待ちにし、楽しく拝読しております。

『香澄』は熱意のこもったイベントや各グループの活動報告だけでなく、プライベート情報も多く紹介されており、パートナーの方々の魅力を更に感じることができる情報誌です。中でも、俳句・川柳・詩のコーナーは、厳選された言葉から情景や感情を想像するのが面白いのでお気に入りです。

また、年に一度開催される“フォトコンテスト”を拝見することや図書グループの方の“読み聞かせ”を拝聴することも好きでした。

そして、私の何よりの楽しみは、イベントなどで皆様のお顔を拝見し、心の触れ合いを通してパワーをいただくことでした。

月日が過ぎるのは早いもので、センターと共に歩み6年が経とうとしております。今日まで成長してこられたのは、いつも家族のように親身に相談に乗ってくださったり、時には人生の先輩として激励のお言葉を掛けてくださったりと皆様に支えていただいたお陰です。

最後にこのセンターはパートナー方々あつてのセンターです。今後も魅力とパワー溢れる皆様の更なるご活躍を心よりお祈り申し上げます。

(受付：高野)

## 霞ヶ浦環境科学センター環境学習フェスタ

去る2月19日(土)に、「霞ヶ浦環境科学センター環境学習フェスタ」を開催しました。当日は天候にも恵まれ、1,000名の方にご来場いただきました。

この催事は、センターの環境学習を受けた児童生徒による「環境学習発表会」を主催事とし、併せてアクリルたわし教室やプランクトン観察などの各種体験型イベントを実施したものです。

また、多目的ホールで行われた環境学習発表会においては、パートナー感謝状授賞式も併せて行われ、10名(うち2名は都合により欠席。)のパートナーにセンター長から感謝状が贈呈されました。

当日は34名のパートナーの皆様にご協力をいただき、盛況のうちに終えることができました。この場を借りてお礼申し上げます。



(センター：高橋)

## パートナー霞ヶ浦講座

パートナー企画部会ではパートナーとして活動する際に、必要となる霞ヶ浦に関する知識を習得する事で、センター利用者に対しよりよいサービスを提供出来るようにする為に「パートナー霞ヶ浦講座」を開催致しました。

講座プログラムは霞ヶ浦の「概要」、「歴史と地形」、「植物」、「魚類」、「野鳥」、「水の中の小さな生き物」、「水の浄化」と霞ヶ浦全体を通した内容の講座として設定しました。

平成22年5月から平成23年2月の7カ月間に合計7回行われ、毎回平均26名が出席されました。その内、7回全て出席された方は13名そして6回以上出席者としては21名いる事からも大変熱心に受講されていた事がわかります。全て出席された13名の方には修了証書とエコバックをお渡しいたしました。

アンケート結果(5段階評価, 5:最良): 1)自分の目的は達成されたか(平均4.1:ほぼ達成された), 2)内容について理解できたか(平均4.2:出来たと思う), 3)講師の説明は的確か(平均4.4:的確だと思う)。いずれも評価点4以上であり十分目的は達成されたと思います。

また受講についての主な要望, 意見等はつぎのようなものがありました。①質問は多くの人ができるような配慮がほしい。②講師の紹介をもう少し詳しくしてもらいたい。③野外観察含めた講座は好評ですが時間が短いという意見もある。④今後も霞ヶ浦に関する講座を続けてほしい。これらを参考にしてパートナー全体のスキルアップに努め、今後もより充実したパートナー講座にしていきたくと思っています。

(栗原)



受講



水浄化実験



修了式

## パートナー企画部会

2009（H21）年5月に、従来のグループ内での受動的活動から能動的活動への変革として、各グループ活動に対し横断的な活動の企画、実践を狙いに設立し、センターとの連携で2年目を迎えました。

この間、種々の課題はありましたが、企画部会活動は関係者のご協力で1回の休みもなく開催され、各プロジェクトをほぼ予定通りに企画、実践することができましたので、活動概要を報告します。

(1) 活動情報の発信でのプロジェクトでは、

- ①センターフェスティバル（夏まつり）におけるパートナー活動ブースへの初出展を行い、多くの参加者があり盛況でした。出展内容は、各パートナーグループ活動の紹介と折り紙や霞ヶ浦に関するクイズなどで、初めての参加でしたが多くの方に喜んで頂きました。
- ②パートナー情報誌「香澄」の発行では、3ヶ月から2ヶ月に1回の発行へと変更し、多くの皆様に見て頂くと同時にセンターのホームページにも4月から掲載され、更なる内容の充実に向け、一生懸命取り組んできました。

(2) 研修・交流の充実では、

- ①センターパートナーとして、幅広い知識習得を狙いにパートナー霞ヶ浦講座の企画を平成22年5月から平成23年2月までの全7回を、センターのご協力を得て開催し、大変勉強になりました。なお、全講座出席者には修了証の授与も行いました。
- ②パートナー全体研修・交流会の企画では、11月21日にパートナー多数の参加のもと、第12回日本水大賞を受賞されました認定NPO法人「宍塚の自然と歴史の会」の及川ひろみ理事長による「里山保全活動について」の講演で、自らの体験を通じた貴重なお話を聴くことができました。午後は、各グループの活動状況の報告とセンター湖沼環境研究室の中村剛也技師による「霞ヶ浦のプランクトンについて」話を聴くことができました。
- ③センター「いきもののにわ」の企画では、十分な議論が足りず、次年度への保留プロジェクトとなりました。

(3) 霞ヶ浦流域の市民団体との交流では、

- ①センター交流サロン事業へ初めて参画させて頂き、社団法人霞ヶ浦市民協会の事業計画について、パートナーとして提案する機会を得られました。引き続き新年度も参画させて頂き、交流を深めパートナー活動に還元していきたいと思えます。

新年度は、新規プロジェクトもあり楽しく、意義ある企画部会活動を展開していきたいと考えておりますので、多くの皆様の参画をお待ちしております。

(尾形)

## 研修グループ

平成22年度の研修グループ活動計画について、昨年2月26日にパートナー及びセンター担当者と初めて策定手順について検討し、平成22年度研修グループ活動計画を立案、実践してきた。平成22年度の活動指針として、あらゆる年代の皆様に安全で楽しく充実した環境学習を提供し、霞ヶ浦を始め県内の湖沼、河川の水質浄化の意識の啓蒙を図る。更にグループメンバー個々が自分にあった目標を持ちスキルupを図り、自主的なボランティア活動を通して、センター事業への貢献を採択した。

**環境学習状況は**、研修室利用者数、団体数ともに、昨年1月末時と比較して上回った。また、内訳として小学生が全体の70%を占め、次に一般が全体の20%の順となっている。来年度は、中学生、高校生の利用を増やして行くことが課題である。

次に、**主な活動概要**として、環境学習業務は従来の研修室補助業務の他に①年9回の研修室でのE・Sキッズクラブ活動の補助 ②霞ヶ浦出前講座における環境学習の補助 ③研修室での新規学習プログラムとして、窒素、リンの分析等が加わった。**パートナー自主企画の推進**として、①「フィールドで水を調べよう」Part1として、桜川の河口から源流まで水質調査（9月19日）を予備調査を含め実施 ②Part1の比較データとして市街地の流入4河川を調査 ③「フィールドで水を調べよう」Part2を河川数を増やし、平成23年3月18日に実施予定。**パートナーのスキルup、知識の習得**として、①環境学習での実験器具基本操作及びプランクトン観察での顕微鏡操作及び写真撮影、プリント方法講習会（4月23日）を実施 ②新規学習プログラム1として、デジタルバックテストで、リン酸態リン、硝酸態窒素、アンモニウム態窒素の分析方法の習得 ③新規学習プログラム2（公定法に準じた、硝酸態窒素、リン酸態リンの分析）として、分析手法、機器操作、知識習得4回～5回の講習会及び勉強会を実施。**研修グループメンバーの情報交換**として、定例会を7月・11月・H23年2月の3回開催し、情報を共有化する中でコミュニケーションを図ってきた。これらは、いずれもグループ担当職員の皆様の真摯な支援があつての事と感謝しております。本年度、習得できた種々のスキル、知識を新年度の活動に反映できればと考えています。

(尾形)

## 植物グループ

植物グループでのパートナー活動は、センター主催の「野外講座」における運営補助活動と、“パートナーの自主的な学習活動”として毎月実施するセンター南湖岸での「植物定点観察活動」の環境学習推進活動です。

下期での野外講座は10月：石岡市大増の大覚寺周辺で恋瀬川源流部の植物と森林の変遷を、11月：常陸川水門付近で冬の植物と水利用を、12月：つくば市山口の宝篋山山麓での植物と平沢官衙跡を、23年1月：「牛久自然観察の森」での平地林の生き物観察を、霞ヶ浦の水質浄化に関連しての植物観察と付近の歴史・文化の学習が行われました。その中で参加するグループのパートナーは活動任務として、「説明補助」「写真」「記録」「安全・ゴミ」の作業を各人それぞれが分担して一般参加者に対応し、パートナー活動のPRと意識確立に努めました。

定点観察活動は昨年度と同様に「AB区」「EF区」「GH区」の3班編成により ジョウロウスゲ(絶滅危惧Ⅱ類)、ノウルシ(準絶滅危惧種)、ヤナギトラノオ(県絶滅種)、アレチウリ(特定外来生物)など22種の指定植物及び昨年度新たに同定された貴重種9種をメインに、その他花や実を付けた特徴ある時期の植物を加えての定点観察を実施し、毎月の観察成果の1部を「観察概況」「特徴的な植物生態写真」「写真のコメント」「位置図」の入ったA1版カラー紙にビジュアルにまとめ、センター展示室に掲示しパートナー活動のPRを図った他、パートナー情報誌「香澄」に活動の抄録を掲載しました。また今年度の“パートナー全体交流会”では今年4月から毎月展示したもの全体をまとめて掲示したところ、講演された「穴塚の自然と歴史の会」の及川理事長の目に留り熱心に鑑賞され、お褒めの言葉をいただきました。これらのデータは今後とも関連する環境団体や来館者との交流にも活用し、霞ヶ浦の環境改善に努めてまいります。(有吉)

## 魚グループ

今年度下期も引き続き自然観察会と魚の定点調査およびセンターのイベントの補助の活動を行った。

下期の自然観察会は4回行われ、パートナーの参加人数は表のとおりである。11月の鮭の観察は今年も参加者が多く、大変にぎわったが、2月のワカサギの人工ふ化は雪模様の天気、寒い日となったため、一般の参加者も少なく、こじんまりとした観察会となった。

魚の定点調査では、水質調査は毎回一定の時間で調査が終わるが、魚調査は捕れる魚が多いとその個体数を数えるのに時間がかかる。魚調査をスムーズに行うにはやはり人手が必要となる。11月と12月の2回はパートナーの人数が多く、2台の車に乗りきれなかったため、1台の車を往復させて実施し、調査がスムーズにできた。10月には新地点でタイリクバラタナゴ、12月には北池でブルーギル、川尻川の側水路でギンブナが、1月には沖宿でシラウオがたくさん捕れた。また、1月は再生地の池半分に薄氷が張り、今までにない、氷を割っての投網となった。

センターのイベント補助は2月に環境学習フェスタで、投網教室を4人のパートナーが担当したが、残念なことに投網教室の参加者は少なかった。(腰塚)

	10月16日	11月20日	1月8日	2月12日
自然観察会	湖岸魚類観察(浮島)	サケの捕獲と人工ふ化	水鳥観察会	ワカサギの人工ふ化
パートナー参加人数	6人	9人	5人	4人

定点調査	10月	11月	12月	1月	2月
パートナー参加人数	7人	9人	9人	7人	7人



水面の半分に薄氷が張っている池での投網調査

# 平成 22 年度冬季 植物グループ「湖岸植物 定点観察」パートナー活動の抄録

(文責：植物Gリーダー 有吉)

## 【H22 年 12 月 観察の概況】 観察日：2010-12-22(水)

年の瀬を迎え木枯らしが吹く中、植物たちは枯れ葉を落とし、種子、冬芽、ロゼット葉などの冬越しの体勢に入っている。その中でもヨシやショウブなどは早くも枯れ葉の下で新芽を出し次世代の営みを始めていた。



[A, B 区] **メマツヨイグサ** アカバナ科  
光を効率よく受けるために根出葉を放射状に広げたロゼット葉。

[E, F 区] **コセンダングサ** キク科  
先端に刺のある果実が衣服に付く「引っ付き虫」の一つ。

[G, H 区] **ショウブ** サトイモ科  
枯れ葉の間から扁平な新芽が見える。表側は見えない単面葉の先端。

## 【H23 年 1 月 観察の概況】 観察日：2011-1-26(水)

寒中の湖岸では植物たちのそれぞれの冬越しの様子が見られた。ヨシやガマ、オギは枯れたままの茎が直立し湖岸特有の冬景色を作っていた。一方で春の到来を予知し芽吹いている気の早い植物もいる。



[A, B 区] **スイカズラ** スイカズラ科  
別名：忍冬、葉の縁を裏に丸めた冬葉で越冬する。

[E, F 区] **タチヤナギ** ヤナギ科  
黄色い枝に白い毛のある芽鱗で覆われた冬芽が付いていた。

[G, H 区] **ノウルシ** トウダイグサ科  
群生地の地面を掘ると横走る地下茎では早くも新芽が芽吹いている。

## 【H23 年 2 月 観察の概況】 観察日：2011-2-23(水)

厳冬が過ぎ春の日差しが感じられる湖岸では、ヤナギ類の先陣を切りカワヤナギの蕾が膨らんで来た。また、堤防法面ではオオイヌノフグリなどが小さな花を咲かせており、植物たちは春の到来を感じているようだ。



[A, B 区] **ヒメオドリコソウ** シソ科  
枯れ草の陰で背を丸めて咲いている。

[E, F 区] **カワヤナギ** ヤナギ科  
芽鱗が取れ雄花の蕾が顔を出した。

[G, H 区] **オオイヌノフグリ** ゴマノハグサ科  
可憐な青い花びらが湖岸で目を引く。

## イベント・記録グループ

今年度の自主活動のメインテーマであった「ウォーキングマップの作成と運用」のマニュアルを作成しましたが、実際に利用する機会がありませんでした。この度どうにか利用する機会があり、戸崎コースのウォーキングイベントは11月6日午後から開催しました。当日は好天にも恵まれ20名が参加されて、戸崎城本丸跡、土塁、松学寺等を見ながら地元の歴史を知りそしてウォーキングを堪能しました。(4.5km/1.5時間) 一方沖宿コースのマップが2月に完成してセンターへウォーキングマップ運用のお願いを致しました。このコースは歴史コースと湖岸の植物観察コースの二通りあります。(5km/1.5~2.0時間) 今後、沖宿コースのウォーキングイベントを開催する予定ですが、その時はぜひ多数の参加をお待ちしています。

**注意：**ウォーキングマップ戸崎コース、沖宿コースは共に試行中で利用についてはパートナー、職員関係者を対象としています。

センター主催「霞ヶ浦入門講座」は毎月1回開催され、一般の方及びパートナーが多数参加されています。イベント記録グループは毎回この講座での活動を記録しそして見学した施設等の資料もファイリングしています。参加出来なかった講座があった場合は活動記録を見ていただければ参考になると思いますのでぜひご利用ください。(栗原)



## 図書グループ

図書グループの下期活動は以下のとおりで、(4)を除くと昨年度の継続作業である。

(1) 新聞スクラップ = 選択希望者 =

- ・作業担当者は5名 補助者が3名
- ・テーマを下記4つに絞った。

①「霞ヶ浦流域における河川、湖沼、ダムに関する情報」に限定し、水質や水環境等に関する記事

②時宜的なトピックスとしての直近のニュース、今回は「COP10」(生物多様性条約)に関する記事

③環境問題をテーマにした新聞社説や論説記事

④常陽新聞掲載の「茨城の水源」シリーズなどの特集記事

①から④のテーマについて、切抜き、分類、貼り付け(スクラップ帳)、目次作成(パソコン打ち込み)等の手順で作業は順調に遂行している。ほぼ年度内に修了予定。

(2) 図書紹介 = 全員 =

四半期ごとに本のテーマを決め、図書紹介文の作成を行った。2月末時点で8件しか実施できなかった。作業参加者が少なくして所定の紹介までにいたっていないのが現状である。

(3) 読み聞かせ

第3日曜日の午後を指定日として、5名ほどの参加で実施してきた。

読み手や聞き手の参加者が少ない状況にある。

(4) 霞ヶ浦に関する「Q&A」の作成 = 全員で取りまとめ =

上記3つの作業進行が主となりQ&A作成については、手が回らなかった。

(山中)

## 「パートナー情報誌 香澄」編集部員募集

香澄編集部では編集部員を募集しています。皆さんからいただいた原稿を、わいわいがやがや批評しながら、紙面に収めていく簡単な作業です。毎月第1金曜日午前10時からセンター2階パートナー室で編集会議を開催しております。多数の皆さんのご参加をお待ちしております。(パートナー情報誌「香澄」編集部)